

清吉汝は腑甲斐無い、意地も察しも無い男、何故私には打明けて過般の夜の始末をば今まで話して呉そなたれ無かつた、私に聞かして気の毒おつと異に遠慮をしたものか、余りといへば狹隘けちな根性、よしや仔細を聴たとしてまさか私が狼狽うろたえまはり動転するやうなことはせぬに、女と軽しめて何事も知らせず置き隠し立うちのひとして置く良人の了簡は兎も角も、汝等まで私を聾に盲目にして済して居るとは余りな仕打、また親方の腹の中がみすみす知れて居ながらに平氣の平左で酒に浮かれ、女郎買の供するばかりが男の能でもあるまいに、長閑のんき氣で斯して遊びに来るとは、清吉汝もおめでたいの、平生いつもは不在でも飲ませるところだが今日は私は関へない、海苔一枚焼いて遣るも厭なら下らぬ世間咄しの相手するも虫が嫌ふ、飲みたくば勝手に台所へ行つて呑口ひねりや、談話が仕たくば猫でも相手に為るがよい、と何も知らぬ清吉、道益が帰りし跡へ偶然ふと行き合はせて散々にお吉が不機嫌を浴せかけられ、訳も了らず驚きあきれて、へどもどなしつゝ段々と様子を問へば、自己おのれも知らずに今の今まで居し事なれど、聞けば成程何あつても堪忍がまんの成らぬのつそりの憎さ、生命と頼む我が親方に重々恩を被た身をもつて無遠慮過ぎた十兵衛めが処置振り、飽まで親切真実の親方の顔踏みつけたる憎さも憎し何して呉れう。

△、親方と十兵衛とは相撲にならぬ身分の差ちがひ、のつそり相手に争つては夜光の壁を小礫たまに擲いしころ付けるやうなものなれば、腹は十分立たれても分別強く堪へて堪へて、誰にも彼にも鬱憤を洩さず知らさず居らるゝなるべし、ゑゝ親方は情無い、他の奴は兎も角清吉だけでは知らしても可さそうなものを、親方と十兵衛では此方が損、我とのつそりなら損は無ない、よし、十兵衛め、たゞ置かうやと逸はやりきつたる鼻先思案。姉御、知らぬ中は是非が無い、堪忍して下され、様子知つては憚りながら既叱られては居りましりすまい、此清吉が女郎買の供するばかりを能の野郎か野郎で無いか見て居て下され、左様ならば、と後しり声こゑ烈しく云ひ捨て格子戸がらり明つ放し、草履も穿かず後も見ず風より疾く駆け去れば、お吉今さら氣遣はしくつゞいて追掛け呼びとむるニタ声三声、四声めには既影はさへも見えずなつたり。